

吉本二郎先生を悼む

著者	永岡 順, 小島 弘道
著者別名	Nagaoka Jun, Ojima Hiromichi
雑誌名	学校経営研究
巻	16
ページ	143-146
発行年	1991-04-01
その他のタイトル	Present Condolences to Prof. Jiro Yoshimoto
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124732

吉本二郎先生を悼む

文教大学 永岡 順

吉本先生のこんなにも早いご逝去に接しようとは思ってもよらなかった。先生が永眠され、私も心から先生の他界を悼むとともに、その失ったものの大きさを、今、改めて感じている。

思えば先生は、我が国における学校経営学の理論的研究者として、今日の学校経営学の学術的發展に貢献され、また我が国の大学をはじめ諸学校の教育改善の進展に尽され、大きな足跡を残してこられた。

先生は、昭和15年東京文理科大学教育学科を卒業されて後、新潟師範学校助教授あるいは大阪学芸大学等の教授を歴任されて、昭和37年からは東京教育大学の教授として、また昭和53年からは大正大学教授として文字どおり研究と教育に専念してこられた。先生はすぐれた洞察力と深い学識とをもって、内外の学術研究をふまえ、常に我が国学校経営学研究の最尖端にあって、めざましい業績を上げられ、後進の研究者、教師等をリードしてきて下さった。

先生は研究活動の面では、主著「現代学校経営論」あるいは「学校経営学」をはじめ多数の著書、論文をとおして、我が国の学校経営学の発展に大きく寄与された。この分野の研究において、先生は第1人者として早くから学校組織論の重要性を指摘されて、我が国学校経営学の新分野を切り開き、学問的基礎を築き上げられた。その研究業績は、我が国現代学校経営学研究の歩みにおいて、高く評価されている。

ふり返ると、我が国の学校経営学研究は、昭和30代以降現代組織論の分析視角からする問題考察の研究方向と内容分析が重視されるに至った。それが基礎となってその後の我が国の学校経営学は、新たな学術的体系と充実した内容を備え発展してきた。それは何よりも、先生の先駆的な研究と多くの業績があったからである。

先生は、教育指導の実際においては、大学教育をはじめ初等中等教育の各学校段階における教育改善に、情熱を傾けられ、教育の実践指導の面においては、沖縄から北海道まで、全国にわたって足を運ばれて、学校教育改善に多大の貢献をしてこられた。

東京教育大学ご在職中は、教育大学が筑波大学へ移転の時期の最後の教育学部長として移転をめぐる問題の渦中において、文字どおり非凡な才能を発揮され、当時を知る者にとっては、先生の名学部長ぶりが、つい昨日のこのように思い出される。多くの後輩、学生とひざを交えて論じ、飲み、歌い、夜を徹して語ることがどれだけあったらうか。

学部長としての激職を果たされ、大学教育改革あるいは初等中等教育改革の渦中において、心血を注いで活躍してこられたことが、先生の死期を早めたのではないかと、誠に傷心の限りである。

大学以外の社会的活動においては、大学設置審議会委員（大学設置分科会）、教育課程審議会委員、中央教育審議会委員として活躍され、あるいは文部省研究協力者会議等の座長として、我が国の重要な教育改革の推進に絶大な貢献をしてこられた。

また教育学分野の学会関係では、日本教育経営学会会長、日本教育行政学会理事、全日本豊教育研究会会長等を務められ、我が国教育界の理論と実際にわたって大きな役割を果たしてこられたのである。

これらは先生の学術研究者としての業績であるとともに、我が国の教育発展の将来に、限りない力をそえるものであると言ってよいであろう。

我が国の教育は、変化し進展する時代の中にあって、さらに一層望ましい在り方を求めて、教育の理論と実践を確立していくために、新しい視角からの思い切った改善が行われなければならないといわれ、現在、進みつつある。そのときにあたり、先生の研究と指導にまつこといっそう切なるものがある。また先生も大いに期するところがありましたらうに、このように早く、にわかにか先生を失ったことは、教育学界、教育界にとっての損失は誠に大きいものがある。

しかしながら先生の業績と、後進に残された感化影響とは、永く学界、教育界の発展の基礎となり、大きな力になっていくと思われる。

ここに先生の永眠を悼み、これまでの私どもへのご指導に対して、心から感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

吉本二郎先生を悼む

筑波大学 小島 弘 道

この度、吉本先生を失い、かなしみは計り知れないものがある。先生の思い出を語ることは沢山あるが、告別に当たって述べた弔辞をここに示し、それに代えたいと思う。

弔 辞

吉本先生、こんなに早く先生とお別れしなければならないとはなんとも残念でなりません。

思えば、先生はわたしが東京教育大学の学部3、4年の時の担任でいらっしゃいました。当時は学生運動が盛んで、わたしはそのことに首を突っ込んでいたこともあって、クラス会がある時には、必ず自治会の報告とプロバガンダをしたものでした。先生は、「こういう席では、それはよそうじゃないか、楽しく語り、飲もうではないか。」と、諭されたことが懐かしく思い出されます。また大学院時代の指導では、問題のありかとポイントを実に適切に指摘されました。こうした指導スタイルは、今日、学生や大学院生を指導する側にあってみると大いに参考になっています。これは、筑波大学の山内君、渡邊君はじめ、先生から指導を受けた者が等しく感じていることだと思います。

日本教育経営学会の会長に就任されますと積極的な学会運営をなされ、昭和61年には「講座日本の教育経営」全10巻を学会の仕事として世に問い、学会活動は飛躍的に向上したように思います。この中で私は事務局長としておつかえし、研究室を超えたところでの仕事について先生から学ぶことができたことは、その後の研究活動にとって大きな財産となっています。

現在、ゼミでは、先人がどのような方法論を用いて学校経営現象を説明し、事柄の本質を明らかにしてきたかについてゼミで取り組んでいます。大阪大学の金子照基教授がかつて私に「小島さん、吉本先生の学校経営学という本は古典だよ」と言っておられた、その「学校経営学」を最初に取り上げています。先生がバーナード理論を学校経営研究の方法論として取り込んだわけを、著書からだけでなく、直接先生からお聞きしたかったのですが、今それがかなわず、残念でなりません。

以前、先生にご挨拶に伺った際には大変お元気で、学校経営研究の在り方や、私の学位はどうなっているかなど、相も変わらず、適切で、つばをおさえたアドバイスを受けてまいりました。しかしこの6月9日、それはおなくなりになる2日前ですが、お見舞いに伺った際、先生の手を

握りしめながら、「先生、小島です」と呼びかけたのですが、返ってくるお言葉はございませんでした。それでも「これからは君達の時代だ、いい仕事をしなさい、世界を視野にいれた学校経営研究を切り開き、国際的に通用する研究室を築いてくれ」との言葉が、先生の手のぬくもりの中から伝わって来たような気がしました。

今ここに先生とお別れしなければならない時に、先生が名実共に日本を代表する研究室にまで築いてこられた東京教育大学、筑波大学学校経営学研究室を引き継ぐことができる名誉と共に責任の重さを改めて感じています。先生のご期待にどれくらい応えることができるかわかりませんが、いつの日か、ここまで来ましたと先生にご報告できる日がきつくとおもいます。その時には、先生が生前、愛唱された「昔の名前で出ています」を歌いながら、酒を酌み交わしたいと思います。その日をお待ちください。

先生、どうぞ安らかにお休みください。

平成2年6月13日